みんなちがってみんないい

その（５）　指導教諭　木村　栄

前回までにLD、ADHD、自閉スペクトラム症についてお話してきました。今回はその他の障がいや気になる特性についてお話します。

はじめに「知的障害」についてお話します。

日本では知的障害の判断基準を、知能検査を用いて考えます。知能検査にはビネー式やWISCなどいくつもの種類があります。同一人物を検査しても、それぞれで産出されるIQは異なります。これは検査で求める知能の内容が違うからで、検査内容も変わります。

一般的にIQ＝１００を標準とし、そこから高くなれば高知能、低くなれば低知能ということになります。通常、知的な遅れがあると判断されるのはIQが７０以下であることがほとんどで、８５～７０までの間をグレーゾーンと呼ぶことがあります。

知的に遅れがあると学習や技能の習得に時間が掛かったり、習得自体が困難になったりすることがあります。通常、学年が上がるにつれて未習得の学習内容が増えていくため、勉強に対しての意欲や根気が続かなくなり、学力不振に陥ることが少なくありません。

次に「愛着障害」です。これは幼児期に適切な親との愛着形成ができていなかったために、発達上の影響を受けて引き起こされる精神疾患です。主な特徴として、適切な対人関係が構築できず対人トラブルを起こしたり、警戒心が強いために、相手に対して暴力的な対応をしたりすることがあります。反対に、誰に対しても警戒心がなく、無分別な社交性を見せる特性もあり、そのために犯罪などに巻き込まれやすくなることがあります。

近年、「愛着障害」の人が見せる特徴が、ADHDなどの発達障がいの人と似ているため、間違って理解されていることが少なくありません。正しい判断には病院を受診することが大切です。

続いて「選択性緘黙（かんもく）」です。「場面緘黙」とも言われます。これは、家族や知り合いなどの前ではよく喋り、まったく問題がないが、学校内や知らない人の前では、まったく喋らなくなったり、小さな声しか出せなくなったりする精神疾患です。学校教育法では、自閉スペクトラム症やADHDなどと同じ「情緒障害」に分類されています。成長とともに消失することもありますが、稀です。早い時期に病院を受診し、相談することが大切になります。「家で話せているんだから、いつか外でも話せるようになるだろう」と軽く考えられがちですが、実際は「引きこもり」などに発展する場合も少なくありません。選択性緘黙の場合、一番困るのは就労です。社会に対応する対人スキルが十分ではないため、職業の選択が限られてくることも少なくありません。「かんもくネット」というHPがありますので、気になる方は一度調べてみることをお勧めします。

今回はここまでにしたいと思います。次回は「感覚調整障害」についてお話します。

「『家で話せているんだから、いつか外でも話せるようになるだろう』と軽く考えられがちですが、」と今回の「みんなちがってみんないい」の中に書かれています。「選択性緘黙」だけではなく、困り感をもった子どもにとって、この、「いつか」とか「たぶん大丈夫」という考え方が、時として子どもを苦しめることにつながります。家族が「このくらい大丈夫」と考えることで、子どもが抱える「本当の困り感」が見えづらくなるのです。

何の手立ても打たず、「いつか」が訪れないままに社会に出ることになったら…困るのは子ども自身です。どんな職業に就くのかということはもちろんのこと、読み書きが苦手なまま、何の手立てもとらずに大人になってしまったら、運転免許を取ることさえ難しいかもしれません。

「『困った子』は『困っている子』」という言葉があります。「人の話をよく聞かない」とか「行儀が悪い」とか、育てにくさを感じた時に、「困った子だ」と思ってしまいます。でも、子どもの側からすると、どうしてもそういう行動をとってしまう理由があるのかもしれません。自分でもどうしてそうしてしまうのかわからないのかもしれません。「困った子」ではなく、「困っている子」なのです。

時津東小学校では、そんな困り感をもった子どもたちの「困った」を減らしていきたいと考えています。「いつか」とか「たぶん大丈夫」という考え方をやめて、どうぞ学校に相談してください。

新しく始まる「令和２年」が、全ての子どもたちにとって良い年となりますように。